

若年性認知症のご家族の「格言」について

最近の上毛新聞の記事で、若年認知症ぐんま家族会会長の大沢幸一さんのことが載っていました。私たちにとっても役立つと思いますので本日はそのお話を致します。（2019/10/22 視点）。

奥さんが55才で認知症になりその2年後にアルツハイマー型認知症の診断を受けたそうです。さらにその2年後の2006年に家族会「若年認知症ぐんま家族会」を設立しました。「妻が認知症になりました」という本も出したそうです。

県の設立総会では、みんな初対面。自己紹介に至った際、なんと、介護人である夫が疲弊しきった表情をしていて、介護人の共倒れ防止も最重要課題であると強く感じたそうです。初めて参加した家族は、涙して苦悩の状況を話し、「何を聞いていいか分からない。どこへ行ったらいいか分からない」と必ず言い、そして「私一人でなかった」と云ったといいます。そして2010年には全国の23の家族会が集まって全国連絡協議会も設立できて今も続いているそうです。

この大沢幸一さんという方がその全国設立総会の時に書いたアピール文での記事に「私どもは、若くして認知症に冒された家族の介護を通じて文字通り苦悶の日々を余儀なくされています。苦悶の日々であっても『人間の尊厳』という重い課題と向き合い、『本人と家族が安心して暮らせる社会の確立をめざす』ことを基調としています。」「とりわけ、高齢期と若年期の認知症を巡る質の違いを明らかにする必要があります」・・・等々と述べています。

私たち老健も、そのような方々に少しでもお役に立てるのであれば大変うれしいことではないでしょうか。

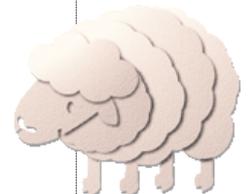
その方が現場の実体験で身に着けた、**介護の3原則は、「怒ってはダメ、ダメと言ってはダメ、押しつけてはダメ」**、ということでした。格言と思います。

一般のいわゆる専門家が言う言葉とは重さが違います。つつい忘れがちな現場からにじみ出る様なこの格言を忘れないようにして業務にあたれば、さらに私たちが求めるような、より良い介護に近づくのではないのでしょうか。

老人保健施設一羊館の理念
利用者の方々すべてに尊厳・安心・満足を！

一羊館の行動指針

私たちは、保健・医療・福祉の架け橋のプロに徹します。
私たちは、利用者のQOL・職員のQOL・健全経営の3立を目指します。
私たちは、質向上のために日々の小さな工夫を忘れません。



話合いの3原則：

- ①相手の意見は決して否定しないでしっかり聞きます。
- ②自分の意見はしっかり言う。ポジティブ表現で言います。
- ③正解は一つではないことを自覚して自制します。